

陳述書

2017年1月10日

私は電機メーカーに25年足らず務める会社員であり、名前を [REDACTED] 申します。会社員を続けながら2009年の4月に同志社大学大学院総合政策科学研究科に設けられた技術・革新的経営専攻の5年一貫制の博士課程に入学し、土曜・日曜や夜間を活用して講義を受けながら研究を始めました。技術者として企業に長年所属している中で、技術開発の成果が日本の電機産業の業績向上に寄与しなくなってきているのではないかと懸念を抱いておりましたので、この原因を社会学的視点から研究してみたいと考えたからです。

入学の1年前余り前の2008年1月頃に私が所属する電機メーカー宛に同志社大学より科目等履修生を派遣してほしいという依頼があり、会社から私に対してこれに応じて欲しいとの要請がありました。そこで私は2008年4月から上記専攻の中から5科目を選択し受講しました。その中の1科目に、山口薫教授が指導される『システムダイナミクス』が含まれていました。システムダイナミクスはマサチューセッツ工科大学を中心に、特定の専門分野に閉じることのない文理を跨る学際的な研究者達によって発達した分野であり、山口薫教授は日本に限らずグローバルでこの分野で活躍される第一線の研究者であるということも知りました。理科系出身で長年技術者として活動してきた私にとって、人文社会科学系の大学院での学習は極めて困難なものでしたが、システムダイナミクスという学際的な分野は理科系の考え方とも親和性が高く、しかも山口薫教授という世界の第一線で活躍しておられる研究者に指導頂く機会を得たことは、2009年4月に正規学生として入学し研究を始めたいと思う主要な動機となりました。

2009年4月に入学した後、山口薫教授のゼミに所属し指導と仰いだことは言うまでもありませんが、入学前の2008年度においても無償で山口薫教授のゼミへの参加をお許しいただき、ゼミの時間におけるご指導は勿論のこと、会社員であるために時間確保自由度が低い私に配慮をいただき、時間外であっても親身に且つ無償でご指導いただきました。

山口薫教授の講義・演習を通じたご指導のお陰でシステムダイナミクスの基本が理解でき、自らの研究テーマに応用することができ、結果として2010年から2013年までに合計3本の査読付き論文を世に送り出すことができました。山口薫教授の指導は、定められた講義時間だけでなく、日曜日や祝日にも関わらず研究仲間と議論する定期的な機会を提供していただくなどにも及びました。山口薫教授の人脈は豊富で、全国の他大学や企業の研究者らも幅広く参加され、私の研究を充実させるための有意義な機会となりました。

(次頁へ続く)



以上まで述べたように、私は 5 年一貫制の博士課程に所属していましたが、4 年次を終えようとしていた 2013 年 3 月に山口薫教授が突然解雇されたことを知りました。残り 1 年で博士論文を仕上げ、修了を目指していた矢先だったので愕然としました。入学から 4 年、入学前を含めると 5 年に渉り山口薫教授のご指導のもと積み上げてきた実績をまとめ上げることが出来るのかという不安でいっぱいでした。

山口薫教授が解雇されたという情報を得た時、当時同研究科に所属されていた山口栄一教授（現在は京都大学教授）にご相談したところ、山口栄一教授のご厚意により、山口薫教授の指導方針をそのまま引き継ぐ形で指導教員を引き受けて下さるとのお申し出を頂きました。これにより、私の研究を続けることは叶いました。そうした意味で山口栄一教授への敬意と感謝の気持ちを強く感じるのですが、山口栄一教授はシステムダイナミクスの専門家ではいらっしゃらないという課題は残りました。

山口薫教授はそうした課題に配慮下さり、2013 年度も学外でプライベートな時間を割いて目録無償で私の研究や学会発表に関してご指導をいただきました。具体的には、私の 3 本目の査読付き論文は、2013 年 3 月に初稿を投稿し、2013 年 5 月末時点で学会の査読委員による 1 回目の査読の結果として初稿に対して幾つかのクリティシズムを受けていたところでしたが、山口薫教授のプライベートなご指導のお陰で、この論文を適切に修正し査読委員を納得させ、論文誌に掲載されるに至りました。

山口薫教授の無償での継続的なご指導のお陰もあって私の 3 本目の論文が学会誌に掲載されたという事実と、結果としてこの事実が私の博士学位取得に至った主な要因の一つになったことを思い、山口薫教授への敬意と感謝の気持ちを私は強く感じております。

以上、山口薫教授から私が受けたご指導の実態を陳述書として提出いたします。

